中学校での辞書指導
――百科事典的な辞書活用法

長久保　礼一

1．目標

私は辞書指導の目標を，学習者が英語を読んだり書いたりする際に必要な情報を適切に得ることができるようになることにおいています。私の経験では，中学生あるいは高校生の典型的な辞書の使い方は，わからない単語に出くわした時に英和辞典を引いて最初の語義を一読して理解したつもりになるというものです。情報の宝庫である辞書を学習者が宝の持ち腐れにしないために，教える側は生徒に対して，辞書を引くことは知的好奇心を刺激してくれる楽しい行為であると実践を通して伝える必要があります。本稿では，中学 2 年生の終わりに，春休みの課題テキストとして生徒に読ませた副読本（*Marcel and the Shakespeare Letters*，Stephen Rabley 著，Pearson Education）をもとに，筆者が授業で行った辞書指導を紹介します。

2．百科事典的アプローチ

2.1．品詞と意味

辞書を引く際には，単語の品詞を特定しなくてはどこを見てよいのか迷ってしまいます。テキストの中に出てきた 2 つの英文を見てみましょう。

(1) He's a detective and he lives in Paris.

(2) His old friend — Henry — has a small flat there.

(1)の detective，(2)の flat の意味を辞書で調べさせる前に，その品詞を生徒に問います。(1)，(2)とも不定冠詞 a が付いていることからそれぞれの単語の品詞は名詞であることを生徒に確認させます。その後，一緒に辞書で名詞の項目を見て意味を確認していきます。(2)の flat においてはアメリカ英語 apartment との比較が書かれています。このような記述にも十分注意を向けさせます。というのも，辞書を引く最大の楽しみはこの寄り道にあるからです。

生徒たちは簡単な単語ほど改めて辞書を引いて意味を確認する作業を怠ります。訳してみて違和感があったら常に辞書で確認するように私は指導しています。

(3) It（＝A sign）says: Professor J. T. Barton

(3)における says では『ベーシック ジーニアス英和辞典』（以下『ベーシック』）の動詞 say の 4 a を見ることで，その正確な意味を理解できます。このような作業を通して最初の語義だけを見ていては適切な情報は得られないということを生徒たちは知ることになります。

既に意味を知っている前置詞の場合でも，辞書を百科事典的に活用することができます。

(4) The two friends sit in big chairs.

(4)では動詞 sit と in が共起しています。どのような椅子なのかと生徒に投げかけてから『ベーシック』で前置詞 in の〖「包囲・包含」が基本的意味〗という記述を読むと，sit on との違いが鮮明になり，2 匹のネズミ（the two friends）が椅子に深く埋もれるように腰かけているイメージが湧いてきます。

前置詞 in が「包囲・包含」のイメージをもつことを理解すると(5)の英文に対する理解も深まります。

⑸ He can see a person, too — a tall woman in a dress.

この場合は，身体が衣服で覆われた感じの「包囲・包含」が意識されるのではと生徒は答えてくれました。その後，一緒に前置詞 in の語義 4 を読んでその意味（「…を身につけて」）を確認しました。

2.2．発音と意味

発音記号は中 2 の最初の段階で一通り学習済みですが，一般的に言って，英語を習い始めて間もない頃は発音記号を正確にすべて覚えているということはありません。『ベーシック』では発音にカナ表記が付いているため，中学生にとっては大きな助けになっているかと思われます。

⑹ ‘Aha!’ Marcel says.

この aha ではどこを強く読んで，どんな時に使用する単語なのかと生徒にあらかじめ問うてから一緒に辞書で強勢の位置を確認します。

⑺ I want to give them to the British Museum in London.

カタカナ語で慣れ親しんでいる「ミュージアム」は英語でどのように発音するのかと投げかけて辞書の発音項目を確認させます。そこで，カタカナ語との強勢のズレを意識し，正しい発音を学ぶことができます。

⑻ There’s a big hole at the back of the safe, . . .

⑻では hole に注目させます。黒板に hall と書き，hole との発音の違いを生徒に問います。その後，辞書の発音項目を見て二重母音と長母音の違いを理解させます。

このように工夫を凝らした問いかけを通すことで，辞書が意味だけではなく発音に関しても様々な情報を与えてくれるということを学習者は理解してくれます。

2.3．２語以上で意味をもつ単語の場合

英語学習者が辞書を引く作業が難しいと感じる理由として，イディオムなどの 2 語以上のまとまりが 1 つの意味を表すものが探しにくいことが挙げられます。

⑼ ‘Oh, you want to look at the Shakespeare letters’ He smiles. ‘OK. Why not?’

この場合の why not は個々の単語の意味は習得済みでも，まとまった意味を生徒たちは知りません。そこで，まずは中心となりそうな語を辞書で引いて記述を上から順に追って丁寧に見ていくよう指導しています。これは紙の辞書の最大のメリットで，このような寄り道を通して新たな発見をすることもあるので，生徒たちにはこの作業こそ大事にするように伝えています。この場合，why を引いて語義 4 を見ると，そのまとまった意味が理解できます。

⑽ There are hundreds of people at Knightsbridge station.

この場合には，hundreds of を調べるにはどうしたらよいかと問うと，hundred を引いて見出しを上から読んでいくのだと生徒は答えてくれました。『ベーシック』では語義 9 でその意味が理解できることを一緒に確認しました。

次のように文型の知識を意識しないと意味を確認できない場合も注意を要します。

⑾ But then his mouth falls open.

⑾では fall を引いてから語義12の［fall C］の記述を読むよう伝えます。

3．まとめ

生徒に辞書を与えるだけでは有効に活用できるようにはなりません。教師がテキストを通して色々な状況に応じて辞書からどんな情報を引き出せるのかを具体的に説明し，そして一緒に辞書を引いていくことが大切だと思います。初期段階では百科事典的に辞書を活用し，多くの寄り道を通して，辞書が与えてくれる様々な発見の喜びを知れば，一生続いてゆくであろう英語学習はきっと楽しいものになると思います。

（ながくぼ　れいいち・南山高等・中学校男子部教諭）